http://www.edu.pref.kagoshima.jp/ （通巻第1592号）

指導資料

鹿児島県総合教育センター

図画工作　第35号
－小学校，特別支援学校対象－
平成20年５月発行

発想力，構想力をはぐくむ図画工作科の指導
－発想・構想段階における指導の工夫を中心に－

図画工作科の授業においては，児童に豊かな発想力や構想力をはぐくむことが大切である。この発想力や構想力は，表現活動全体を通して児童が試行錯誤を繰り返す中で高まっていくものである。特に発想・構想段階と言われる題材の導入部分では，この能力をはぐくむ機会が多い。しかし，「児童から豊かな発想を引き出せない。」，「どうやって構想をさせたらよいか分からない。」など，発想・構想段階における指導を課題としている教師が多く見られる。

そこで，本稿では，発想・構想段階における発想力や構想力をはぐくむ指導の工夫について述べる。

1　発想力，構想力について

発想力とは，自分なりに造形的な感覚や感受性を発揮して，いろいろなことやものなどから感じ取り，想像力を働かせて自分の表現の意図や思いなどを心の中に思い描く能力のことである。構想力とは，想像力を働かせて，それらを膨らませながら，よりよい方向や方法などを考える能力のことである。この発想力や構想力をはぐくむための方法として，発想・構想段階における題材名の工夫，授業に入る前の事前の手だて，五感に訴える思いの広げ方，豊かに構想させる手だてに焦点を当てて述べていく。

2　発想・構想段階の工夫について

(1)　多様な発想を促す題材名の工夫

題材名は，児童一人一人が学習の主題や意図をつかむことができるようにするとともに，想像力を働かせてこれからの自分の表現や鑑賞の活動のイメージを豊かに思い描けるようにする重要な働きをもつものである。したがって，児童一人一人の興味や関心，経験の実態などを十分に把握して題材名を工夫していくことは，発想・構想段階での児童の多様な発想を促すとともに，その発想したことが次の活動へ大いに役立つことになる。

そこで，題材名を決定する際，考慮しなければならない事項を以下に挙げる。

児童一人一人が
○　主題を見付けられる題材名
○　創造活動を楽しもうとする意欲がわく題材名
○　活動のイメージを豊かに思い描けるような題材名
○　発想や表現を限定することなく，豊かに広げられるような題材名

具体的には，次のような題材名が考えられる。

【案内的・提案的題材名】
○　板の変身　　○　私たちの未来都市
○　魔法のとびらを開いたら
○　世界で一つしかない私だけの不思議な箱
【活動内容を表わす題材名】
○　切って，折って，くっつけて
○　つんで，つんで，うんとつんで
○　まるめて，つなげて，そして・・・
○　ぼく，こんなに大きくかけたよ
【感覚的なものを表わす題材名】
○　ゆらゆらごろごろ　○　ぺったん，ぺったん
○　たかい，たかい　　○　のびる，のびる

この他にも補充的な題材名や複数の題材名を提案することも考えられる。また，題材名の前に「私の」とか「不思議な」などの説明の言葉を加えることも，児童一人一人に主題意識をもたせ，自分の発想を広げさせることに効果的である。

【補充的な題材名】
○　粘土の変身・・・私のお母さんへのプレゼント
【複数の題材名】
○　笑った顔，泣いた顔，不思議な顔・・・

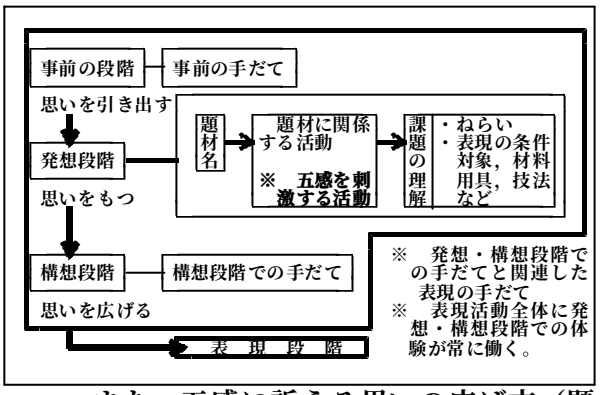
(2)　発想・構想段階を充実させるための事前の手だて

発想・構想段階において，児童に「すぐに発想や構想をしなさい。」と言っても，教師の何の手だてもない中で豊かな発想や構想ができるものではない。児童の発想は，授業前に学習で必要な材料を集めるところから既に始まっているのである。したがって，次時の学習のために手だてを講じることは，図画工作科では重要な意味をもつのである。児童は，今度の学習では何をつくろうかという思いを巡らせながら材料を見立て，自分なりにこだわりをもちながら必要な材料を集めているのである。例えば，絵を描く活動においても，何を描いたらよいか迷う児童もいることから，あらかじめ自分の生活経験を掘り起こさせるために，生活ノートを参考にさせたり，ワークシートなどを活用させたりして事前に描きたいものの材料を集めさせることもとても大切なことである。

(3)　発想を促す五感に訴える思いの広げ方

表現段階で児童が豊かな発想や構想を基に主体的に活動するためには，発想・構想段階において表わしたいものを心の中にはっきりとイメージさせることが必要である。そのための方法の一つとして，五感に訴える思いの広げ方を工夫すれば，児童は課題を理解し，多様な発想をして表現活動に入ることができ，また，その経験が表現活動全体に生きてくることになる。

五感に訴える思いの広げ方を図示すると以下のようになる。



また，五感に訴える思いの広げ方（題材に関連する活動）として，図画工作科では，視覚，聴覚，触覚に訴える方法がある。以下は，その例である。

【視覚に訴える思いの広げ方】
○　教科書を見せる。
○　参考作品を見せる。
○　実物，材料などを見せる。
○　視聴覚機器を使う（ＯＨＰ，ビデオ，スライド，パソコンなど）。
○　紙芝居や掛け図を見せる。
【聴覚に訴える思いの広いげ方】
○　音楽や題材に関連した音を流す。
【触覚に訴える思いの広げ方】
○　実際に対象物や材料に触れさせる。
【視覚，触覚ともに訴える思いの広げ方】
○　操作活動や試しの製作（材料遊びを含む）をさせる。
○　再体験をさせる（ポーズをとらせる）。

児童が対象物を見たり，聞いたり，さわったりする経験を積み重ねることで，受容，分析，批判，選択といった鑑賞力が培われる。そして，その鑑賞力が発想力，構想力を高めることになる。

この他に，五感に訴える方法の内，発想力や構想力を高めるために，逆にその五感の一部を遮断する方法もある。以下は，その例である。

【感覚を遮断する例①】
視覚を遮断することで，対象や見えに対する認識を再考する方法である。例えば，箱に隠したものを想像させることで，感覚を研ぎ澄まさせるのである。

【感覚を遮断する例②】
完全な状態からその一部が欠如した状態をつくり出す方法である。例えば，ピンぼけ写真を提示することは，見たいという欲求を誘発することなる。ミロのビーナスの場合は，腕がないことからどういったポーズをしていたのかという想像をふくらませることができる。その他にも，物語の途中までを示し，その後のことを考えさせたり，この扉の向こうには何があるのかということを扉だけを示して想像させたりする方法もある。

五感に訴える思いの広げ方についての配慮事項を以下に示す。

児童一人一人が
○　興味をもち，楽しく取り組めるもの
○　表わしたい，つくりたいという気持ちになれるもの
○　表わしたい，つくりたいもののイメージがわくもの
○　その題材で身に付けなければならない技能をさりげなく含んだもの
○　気付いてほしいと思われるものを含んでいるもの

(4)　豊かに構想させる手だての工夫

児童が，主体的に表現活動を展開するためには，まず，児童に表したいものを心の中にはっきりと形や色としてイメージさせることが大切である。次に，自分の表わしたいもの，つくりたいものの大まかな製作計画なり見通しをもたせることが必要である。そのための手だてとして，以下のようなものが考えられる。

【豊かに構想させる手だての例】

○　図工カードなどを活用して，児童自身に自分なりの製作計画を立てさせる方法
※　教師が作成した学習計画を基に，自分のペースを考えて児童が作成する。
○　アイディアスケッチをさせる。設計図や構想図を作成させることで，表現したいもののイメージをはっきりともたせることができる。さらに具体的に形や色，材料やつくり方などの説明を記入させることで，つくる手順を児童にはっきりと意識付けさせることができ，また，必要な道具も把握させることができる。
○　実際に簡単につくった方がよく理解できる児童もいるので，試しづくりの場を設ける方法もある。

【図工カード】　【アイディアスケッチ】

3　発想・構想段階の工夫の実際

発想・構想段階の工夫について，第５学年の絵に表わす学習の例を以下に示す。

1　題材名　「こんなとき感じること思うこと」
2　題材の目標
(1)　夢中になったときや心に残った場面などを思い出しながら，絵に表わす楽しさを味わう。
(2)　思いがよく伝わるように，画面構成や色の組合せなどを工夫する。
(3)　作品を見ながら，お互いの感じたことを話し合うことで，自他の表現のよさに気付く。
3　指導計画（全７時間）

過程	時間	主な学習活動
事前段階		1　生活を振り返り，絵に表わしたいことの材料を集める。
発想段階	1	2　参考作品を基に，感想や場面の情景を話し合い，絵に表わしたいことの思いを高める。 3　学習のめあてを立てる。
構想段階	1	4　ワークシートを使って，絵に表わしたいことを決める。 5　アイディアスケッチを行う。
表現段階	2	【線描】 6　アイディアスケッチを基に，絵に表わしたい思いを線描に表わす。
	2	【着色】 7　絵に表わしたい思いを彩色する。 8　自分が表わしたい絵の感じが出るように彩色を工夫する。
鑑賞段階	1	9　作品鑑賞会を行う。 10　学習のまとめをする。